

病害虫の発生概況

〔病害発生概況〕

1. 稲・麦

4月前半は冬型の気圧配置になり低温が続く、月平均気温は各県とも2℃前後低かった。このため早期水稲では初期生育が遅れ、宮崎県では葉いもちがやや多発生になった。6月下旬～7月上旬の降雨により宮崎、鹿児島県の穂いもちはやや多発生した。普通期水稲では4月の低温により福岡、佐賀県においては麦の生育、収穫が遅れたため育苗期間が長くなり、苗いもちの発生が多く、罹病苗の移植が葉いもちやや多発生の一因になったと考えられる。また大分、鹿児島県でも7月上旬の降雨、低温により葉いもち発生量は多くなった。葉いもちの発生が多かった県では出穂期前後の降雨により穂いもちもやや多発生になった。ヒノヒカリに代表される良食味品種の多くは圃場抵抗性が弱いので、感染好適日が数回出現した場合には多発生になる危険性があり、適期防除を励行する必要がある。

稿葉枯病が長崎県の普通期水稲でやや多発生した。佐賀県では少発生、福岡県では全く問題になっておらず長崎県だけの特異的発生である。7月1半旬より発生が確認され、8月2半旬から発生が増加した。後期感染が主体であり、1株中1～2茎の発病が多く、収量にはほとんど影響はなかったが、西彼長崎、対馬では発病株率10%以上の圃場もあった。ヒメトビウンカの越冬量はやや多かったが、保虫率は例年に比し特に高い傾向は認められず、3月では1.2%、5月で0.6%であったので多発生になった原因は不明である。

白葉枯病が大分県で多、熊本、宮崎両県でやや多発生した。台風6号、12号の襲来が原因になったと考えられるが、坪状発生圃場が多かった。

麦類の病害は全般的に平年並みかやや少発生であったが、オオムギ斑葉病が佐賀、熊本県でやや多発生、大分県でも各地で発生が認められ、甚発生圃場もあった。種子消毒の不徹底が原因である。

2. 野菜・畑作物

天候が比較的平穏に推移したため、特に多発生し、問題となった病害はなかった。イチゴでは近年多発傾向にあるうどんこ病が福岡、佐賀、宮崎県でやや多発生したが、他の県では少～やや少発生で全体的には平年より発生は少なかった。長崎県で主として問題になっている炭そ病は同県で本年もやや多発生し、*Colletotrichum acutatum*による炭そ病は発生地域が拡大した。

キュウリでは褐斑病が佐賀、大分県でやや多発生したが他の県ではほとんど問題にならなかった。うどんこ病、

モザイク病(急性萎凋症)が宮崎県の夏秋キュウリにやや多発生した。沖縄県ではニガウリのうどんこ病が施設栽培でやや多、露地栽培では6～8月に多発生した。

スイカでは鹿児島県の半促成栽培で6月中旬～7月中旬に降雨が多かったため疫病、炭そ病がやや多発生した。その他野菜では特記すべき病害の発生はなかった。

ダイズでは宮崎県で紫斑病、モザイク病がやや多発生したが、全体的にみてべと病、葉焼病などは平年並みであった。ジャガイモでは長崎県においてジャガイモYウイルスによるモザイク病の発生が1995年より急増しており、本年もやや多の発生になった。罹病いもちが増加していると考えられ、種いもち更新の徹底が必要である。

本年新たにインゲン炭腐病(鹿児島)、トマト黒点根腐病(大分県)、トマト黄化萎縮病(長崎県)、ハクサイ輪紋病(鹿児島)、ハクサイ・キャベツ根こぶ病(佐賀県)、イチゴ茎腐細菌病(大分県)の発生が確認された。

3. 果樹

果樹の各種病害も全体的には平年並み～少発生であった。カンキツでは黒点病が熊本県でやや多発生した。樹勢の弱った園が多く、また伝染源となる枯れ枝の量が多いことに加えて、梅雨期の連続した降雨が原因になったと考えられる。かいよう病が佐賀、鹿児島県、そうか病が熊本県、灰色かび病が大分県でやや多発生した。

ナシではうどんこ病が7月上旬の低温、曇天により福岡、長崎県でやや多発生した。また、黒斑病が佐賀県、赤星病が熊本県、輪紋病が熊本県でやや多発生した。赤星病の発生は4月の低温によりピヤクシン類の冬孢子堆からの伝染が長く続いたこと、輪紋病は罹病枝のせん除と枝幹の病斑削除不徹底によりイボ皮病の発生の多いことが原因になったと考えられている。

ブドウでは佐賀県の露地栽培で褐斑病が多発生した。収穫後の防除の不徹底、近年の異常気象による樹勢の低下が原因になったと考えられる。鹿児島県でもやや多発生であった。黒とう病、枝膨病が福岡県において7月上旬の低温によりやや多発生した。

4. 茶樹・花き・特用作物

茶樹、イグサでは特記すべき病害の発生はなかった。サトウキビの各種病害は並み～少発生であり、鹿児島県における黒穂病、葉焼病、さび病などの減少は抵抗性品種NIF8の栽培面積の増加が一因になっている。

(九州農業試験場地域基盤研究部)

〔害虫発生概況〕

1. 稲・麦

海外飛来性水稻害虫のセジロウシとトビイロウシの飛来時期は平年どおりであったが、飛来量が全般に少なく2年連続で少発生となった。これに対してコブノメイガは福岡県を除き平年並み～多発生で第一世代の加害が目立ったが、第二世代の発生は平年並みにおさまった。本種の発生は近年増加傾向が続いており、1995年の発生面積は稲害虫の中で最高であった。

土着害虫のツマグロヨコバイは全般に少発生で、本種が媒介する萎縮病の発生はほとんどなかった。萎縮病の発生は1970年代から一貫して減少している。一方、ヒメトビウシが媒介する縞葉枯病の発生も、1985/86年の突発的大発生のおと年々減少していたが、1995年には長崎県と宮崎県で多発生し、とくに後期感染が問題となった。多発生はヒメトビウシ密度の上昇によっておきたが、その原因は不明であり、海外からの飛来個体群がそれに関与した可能性も考えられる。斑点米カメムシ類は全県的にやや多～多発生であり、北部ではクモヘリカメ、ホソハリカメが、南部ではそれに加えてミナミアオカメによる加害が問題となった。その他の土着害虫の発生は概してやや少～平年並み発生であった。

侵入害虫のイネミズゾウムシとスクミリンゴガイの発生はやや少～平年並みの県が多く、被害面積は少なかった。両種の発生面積は侵入後増加を続けていたが、近年は頭打ちの傾向がある。

このほかに特記事項として、発生面積はまだ少ないがニカメイチュウ、シンガレセンチュウ、イネドロオイシの密度上昇あるいは分布拡大がみられた。

麦の害虫はいずれも発生がやや少～平年並みで被害は問題とならなかった。

2. 畑作物

ダイズ：ハスモンヨトウは全県的に発生時期がやや遅く、発生量もやや少～平年並みであった。心配されたカメムシ類の発生は宮崎県でやや多であった以外は平年並み以下であった。

サツマイモ：鹿児島県ではハスモンヨトウが8月下旬以降増加し多発生となったほか、イモキバガ、ナガジロシタバもやや多発生した。他県では主要害虫はいずれもやや少～平年並みの発生にとどまった。

ジャガイモ：害虫の発生は概して少なく、アブラムシ類、ニジュウヤホシテントウ、ヤガ類、ジャガイモガの発生はいずれも平年並み以下であった。

3. 野菜・花き

共通：1995年までに九州全県で分布が確認されたミカンキイロアザミウマは、各県において分布地域が拡大している。また、寄主植物もイチゴ、ピーマン、トマト、キュウリ、カボチャ、バラ、キク、スターチス、カーネー

ション等に及び、イチゴ、トマト、キク、バラでは本種の多発による実害も出始めている。

マメハモグリバエは九州・沖縄全域でナス、トマト、キク、ガーベラ、シュンギク、セルリー等を中心として多種の作物で発生が多い傾向にある。

ナス科野菜：沖縄県の冬春ナス、大分県のピーマンでミナミキイロアザミウマが多い傾向にあったが、アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類等害虫の発生は平年並みかやや少ない傾向にあった。大分県ではチャバネアオカメムシがピーマン、ナスに大量に飛来し、問題となった。

ウリ科野菜：ミナミキイロアザミウマ、アブラムシ類、ハダニ類等の害虫の発生は、宮崎県のキュウリでミナミキイロアザミウマがやや多発生したほかは、全般に平年並みか少ない傾向にあった。キュウリでスジブトホコリダニの発生が初確認された（福岡県、佐賀県）。

アブラナ科野菜：コナガが沖縄県のキャベツとダイコンで多発生したほかは、アブラムシ類、アオムシも含めて害虫の発生は平年並みかやや少ない傾向にあった。

イチゴ：ハダニ類とアブラムシ類は、宮崎県と長崎県でハダニ類が多発生したが、全般に平年並みか少発生であった。ハスモンヨトウは大分県と熊本県で多かった。

その他の野菜：サトイモでハスモンヨトウが多発生した（鹿児島県、大分県）。鹿児島県の春蒔きゴボウでハイイロサビヒョウタンゾウが多発生した。

4. 果樹

共通：果樹カメムシ類が前期に多発（飛来）し、多くの樹種に被害を及ぼした。とくに、カンキツではこれまでほとんど問題にならなかった幼果への吸汁加害による落果が認められ、問題となった。多発要因として、カメムシ類の越冬量が例年になく多かったこと、餌の量とくに7月以降の主要な増殖源であるスギ、ヒノキの毬果が極めて少なかったことが考えられる。

また、カメムシ類防除のため、合成ピレスロイド剤等の殺虫剤を多用したカンキツ、ナシ、モモでは、秋にハダニが多発する傾向が認められた。以下、カメムシ類、ハダニ類以外の害虫の発生状況について述べる。

カンキツ：ミカンサビダニが佐賀県で多発、鹿児島県でやや多発生した。佐賀県ではジチオカーバメイト剤に対する抵抗性が顕在化したことが主な原因としている。チャノキイロアザミウマが沖縄県で多発、熊本県でやや多発生した。全般的に秋期の被害が多い傾向が認められた。ミカンキイロアザミウマが鹿児島県（ハウス）で新たに確認された。

ナシ：1995年に発生が多かったナシヒメシクイはカメムシ類対象の薬剤散布により、平年より少～並みの発生であった。その他主要害虫の発生も平年並みであった。

モモ：熊本県でアブラムシ類がやや多発生したほかは、平年並みの発生であった。

ブドウ：主要害虫の発生は平年並みであった。
 カキ：フジコナカイガラムシが昨年と同様福岡県で多発した。その他の害虫の発生は平年と比べて少～並みであった。熊本県のハウスでミカンキイロアザミウマの発生が新たに確認された。

クリ：主要害虫の発生は平年並みであった。
 熱帯果樹：沖縄県のマンゴーでマンゴーハダニとマンゴーツバカイガラムシの発生が新たに確認された。

5. 茶樹

クワシロカイガラの被害拡大傾向が宮崎、佐賀、鹿児島各県で続いており、常発地での被害が問題となった。

その他の害虫ではカンザワハダニが長崎県と宮崎県でやや多、チャノキイロアザミウマが鹿児島県でやや多の発生となったほかは少～並みの発生であった。

6. 特用作物

サトウキビ：カンシャワタアブラムシが宮古・八重山地域で多発した。カンシャコバネナガカメムシが奄美諸島でやや多発し、徳之島では一部航空防除が行われた。

いぐさ：イグサシシムシが熊本県でやや多発した。
 (九州農業試験場地域基盤研究部)

(野菜・茶業試験場久留米支場)

(果樹試験場カンキツ部口之津)

1996年水稻主要病害虫の発生面積

(単位：ha)

病害虫名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄
(病害)								
葉いもち	33,381	15,195	7,000	14,000	19,250	17,316	15,553	176
穂いもち	35,669	6,315	3,300	12,000	12,000	21,522	17,150	53
紋枯病	36,061	26,675	8,800	15,000	24,500	16,798	26,582	180
白葉枯病	2,822	1,830	50	1,600	2,700	507	40	0
もみ枯細菌病	28,653	4,750	—	100	3,400	1,089	3,795	—
縞葉枯病	233	150	1,000	70	300	0	0	0
萎縮病	582	250	10	500	600	0	83	—
黄萎病	—	0	5	—	—	1,312	91	—
ごま葉枯病	582	3,600	2,600	100	5,400	0	1,204	244
ばか苗病	597	250	1,200	150	1,300	0	1,740	1
心枯線虫病	54	50	—	20	3,800	0	631	1
内穎褐変病	—	—	—	—	—	—	25,466	—
稲こうじ病	22,946	1,670	—	—	12,000	5,433	4,044	—
(虫害)								
セジロウンカ	29,722	25,110	9,500	10,000	4,700	27,144	27,251	135
トビイロウンカ	5,473	9,900	5,700	6,000	3,400	3,977	9,989	76
ヒメトビウンカ	25,855	3,600	10,000	3,000	5,600	26,377	1,950	2
ツマグロヨコバイ	19,232	10,440	3,800	7,000	7,800	22,319	8,250	405
コブノメイガ	33,912	31,450	16,700	35,000	26,500	11,705	30,149	287
イネツトムシ	12,467	3,600	1,000	—	2,500	250	10,972	0
イネヨトウ	789	550	1,200	100	900	0	20	0
フタオビコヤガ	582	0	180	—	2,200	0	1,330	1
アワヨトウ	0	100	10	90	350	0	0	0
ニカメイチュウ第1世代	411	0	—	0	350	0	10	0
ニカメイチュウ第2世代	1,120	200	—	0	300	0	0	0
イネミズゾウムシ	5,019	4,400	6,200	5,000	15,000	20,750	9,910	517
イネゾウムシ	5,486	1,570	3,000	100	7,340	4,436	7,738	44
斑点米カメムシ類	11,243	7,800	8,200	2,500	11,200	12,250	10,105	139
イネクロカメムシ	1,371	85	800	50	700	0	301	10
スクミリンゴガイ	17,461	9,692	1,358	4,000	3,450	4,412	4,852	84
総作付面積 (244,616)	48,500	34,800	17,700	49,900	31,230	28,100	33,260	1,126

注) 発生面積は早期・普通期または一・二期作の合計値で示した。